

み国が来ますように ελθετω η βασιλεια σου

主の祈りで唱えるこの句、「み国が来ますように」。

み国が来なければどうなるか、そもそもみ国とは何か、そしてみ国が来ますようにと祈ることはどういうことなのか、あなたをご存じですか？

今あなたがいる国は日本国です。2月11日は建国記念日で、戦前は紀元節と呼ばれていました。この日は、初代天皇である神武天皇の即位の日と言われていています。紀元前660年から本年まで2675年という長い歴史を持ちます。その真偽は別として歴史のある国の一つです。島国であったためか民族は均一性が高く、方言はあるものの言語は一つです。あなたは、家族や国のために働き、その収入から税金を支払い、そのお金で子供達に教育を受けさせ、国民としての義務を果たしています。これは憲法上の義務ですが、これを喜んで行うなら、宗教的にも同時に大きな隣人である国家に尽くすという善を実践しています。

国際連合が創られ、平和憲法が施行され約70年。少しずつ改善しているとはいえ、世界の紛争が絶える日はありません。日本の周りでも、領土の争いは、北に南に西に。経済利権の争い、敗戦国として過去の歴史に対す償いと非難は続きます。それは論理を超え感情的な嫌悪にまで発展し、非難の応酬、隠れた差別として続きます。平等で公正な理想の世界は、未来といえど、そう簡単には到来しません。

国家レベルだけではなく、企業や地域などの様々な共同体、はては教会の中でさえ、争いや嫌悪は無くなりません。細かいことにこだわり、隣人を差別し、嫌悪し憎悪します。差別や憎悪の理屈を、自分勝手に次々と作り出して、自分たちを正当化します。正当化されたものが常識となり、自分の常識で相手を判断します。国と国、人と人、それぞれ自分の常識で相手を責め、自分の権利を主張し、自分を正当化します。自分も相手もかたくなになり、相手を赦し受け入れる状態ではなくなります。これがみ国が来ない状態です。この憎悪や嫌悪は、蛇の毒が入り、心臓の鼓動によって身体を循環して身体の健全な部分を次々機能を止め壊死させるように、心の中で育ち、気づかない内に大きくなってゆきます。きっかけさえあれば、憎悪と嫌悪は表に出て、たちまち争いです。

創世記12章の冒頭で、アブラムは、生まれた地「ハラン」に居ました。ハランは、今問題のイスラム国、ISILの支配地のそばにあるトルコ領の古代都市です。歴史的には偶像崇拝の地、内的な意味では「曖昧な」(天界の秘義 1430)を意味します。「生まれた地」とは、肉体的快樂や感覚から認識したもの、さらに深くは、それら肉体的快樂に惹かれることやそこら生まれた常識の類を意味します(天界の秘義 1412参照)。靈的にはそこが生まれ故郷です。あなたはその「生まれた地」に居ます。あるいはエジプトという世の「常識」に囚われ、自分の好物である「エジプトの肉鍋」を暖かいこたつの中でつついています。このままではいつか破綻しますが、なかなかそこから離れることができません。これがみ国が来ないです。

そこで、アブラムがハランから呼び出され、カナンに向かい、エジプトで囚われていたイスラエルの子孫

がモーセに引き連れられて、囚われを逃れカナンに向かったように、そういう世界から離れ、理想の国を求め、祈ります。それが「み国」です。この「み国」とは何でしょうか？

「み国」のギリシア語原語は、バシレイアといい、「支配・王国」の意味です。語源は「私が王である、私が支配する」です。み国は、民主的な国家や、国民が国家を所有する共和国家ではありません。民主国家は、話し合いや多数決で物事を決定しますが、み国はそうではありません。どなたが王なのか？ どう支配するのか？ これは、主の祈りの前の二句にあります。

「天にいます私たちの父よ」 Πατερ ημων ο εν τοις ουρανοις

この句には、ポイントが三つあります。天・父・私たちです。

祈りのはじめに、まず心の目を天に向けて上げます。自分より上のもの、高いものがあることを思い出して心の目を向けます。そこは天界であり、あなたが目指す場所です。そしてその天は高いところであると同時に、あなたの最も内側です。外にはありません。宇宙の果てにも、宇宙の誕生以前にも、未来にも、どこにもなく、ただあなたの最も内側にあります。

父、あなたに生命を与えられ育てておられる方、あなたの生命の源泉です。遺伝的な父ではなく、最も内におられる父に呼びかけます。

しかし「あなた」の父ではありません、「私たちの」父です。

天の父は自分だけの父ではありません。自分の内側にありながら、全人類の各人の内側にも存在され、あなたにも、あなたの隣にいる人にも、あらゆる人類、霊界・天界・地獄の住民のすべてに生命を間断なく与え続けられておられます。ここで自分だけではなく、同胞・兄弟・姉妹の多くの隣人がいることを意識します。

「御名が聖とされますように」 Αγιασθητω το ονομα σου.

御名とは性質をあらわします。前の句で出てきた父、それはどんなお方であるかご存じですか？

自分の最も内側におられる方、いと高きところにおられる方が、一度だけ地上にお生まれになりました。生まれた当時は、ほかの新生児と何ら変わることはありませんでした。魂が父であることを除いて。あなたと同じように、周りの人々と係わって教えられ、学び、育ててゆき、魂だけではなく、その心の中、自然的肉体までも父である神と同じようになさいました。これが神の人、神的な人間と言われ、私たちの心と考え方が生まれ変わり、天の住人になる路を、自らお示しになりました。この方イエス・キリストが神聖そのものであることを認め、あなたの心の中で総て俗なるものと区別します。俗なるものは神聖なものに心から跪きます。

「御名が聖とされますように」は、イエス・キリストをたたえるためではなく、私たちのためです。イエス・キリストが何をされたか、福音書で伝える私心のひとかけらもない行いとみことば、旧約聖書の中にあり、天界の教えで明かされた内的意味によってその本当の意味を心に思いだして、改めて神聖な思いを抱き、受け入れます。あなたの心の中にある、余計な自身、自負心、プライド、これらがイエス様が行われた神聖なものに比べれば無価値であることを知り、私たちが謙虚になるためです。



しかし、主はそれをご存じです。ご存じの上で、あなたに命じられます。それでも赦しなさいと。

赦せない状態は、人はとてもかたくなな状態です。土壌でいえば、乾ききってカチカチのコンクリートのような状態です。雨や流れる水さえ拒む巨大な岩かもしれません。赦せない記憶が何かの拍子に戻ってくると、怒りや恐怖から情愛はコンクリートになってしまいます。そのときは何を言われても「赦せない！赦せない！」と受け付けません。主の赦しでさえ受け付けない状態になっています。最愛の人を傷つけられた恨みを、私が覚えておいてやらなければ、最愛の人は決して浮かばれないだろう・・・と。

情愛は何に喜びがあるかでわかります。しかし恐怖や怒りの状態には喜びがありません。こわばってしまっています。心は穏やかで柔らかくなければ、人を大切にできません。主の暖かいスフィア、神聖で善いものを受け取るには、主からくる神聖で善いものを受け取れる、穏やかで柔らかな状態、これを喜ぶ状態でなければなりません。

そのときは怒りと恐怖で喜びとはほど遠い状態になります。しかしそのとき、主の支配を求めて祈るなら、主がお働きになります。心を相手や、その不快で喜ばしくない状態から、天の父に目を上げ、父はあなた一人ではなく、総ての人の父であることを思い出し、その方はみことばで学んだ主イエス・キリストであることを思い、主の御性質を思い起こし、主の神聖で善いもの、主による支配を祈り求めます。自分の怒りや恐怖の支配から離れることができるよう祈ります。自分が相手を赦せない理由を思い出して並べるのではなく、その支配からも離れます。離れて心を主とその秩序に向けることができるよう、ご命令だけを素直に受け入れることができるよう、祈り願います。主とその支配を求めるならば、かなえられます。人をすべて救い、自分のものをすべて与えたいという主の柔らかく、無限に暖かいお気持ちを受け取ることができます。この柔らかく暖かいお気持ちこそが、主の王国を支配する源です。

主のこのお気持ちが、信仰の種となり、あなたに注がれ、あなたはそれを受けて、あなたの中で行動として実現しますように。

「み心がなりますように。天に於けるように地においても」アーメン、

創世記 12:1-4

エホバはアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

アブラムはエホバがお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがハランを出たときは、七十五歳であった。

マタイ 13:3-13, 17-23

イエスは多くのことを、彼らにたとえで話して聞かされた。「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。

蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。

また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。

しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。

また、別の種はいばらの中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。

別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。

耳のある者は聞きなさい。」

すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」

イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天のみ国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。

というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。

わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

まことに、あなたがたに告げます。多くの預言者や義人たちが、あなたがたのしているものを見たいと、切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。

ですから、種蒔きのたとえを聞きなさい。

み国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。

また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。

しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結

び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」

#### 霊界体験記 4637. 隣人に対する仁愛について

聖なるものと善が、主から天使を通して人とその生命の喜びに下ると、それは地の中に落ちた隠れた種のようになります。喜びが高慢や自己愛であれば、茨の茂った悪い地に落ちたことになり(マタイ 13:7, マルコ 4:7, ルカ 8:7)、利得を追い求める欲の喜びに落ちれば、この土地は天使から見れば、不毛の、腐った、糞尿のようであり、そこに落ちれば、悪によって呑み込まれ何も善いものがなくなります。

しかし主から善と聖なるものが、他人をいたわる喜びの中や正義や公正さへの情愛に、同様に役立ちがない利得や名誉への軽蔑の中に落ちれば、それは善い土地の中に落ち、たくさんの実を結びます(マタイ 13:8, マルコ 4:8, ルカ 8:8)。情愛自体が土地であり、その性質は人の喜びによってのみわかります。

最良の土地は、他人を思いやる情愛があり、事実、主のうちにあり思いやる信仰です。

役立ちからではない、名誉や地位による喜びは最悪の土地であり、役立ちからではない富の喜びも同じです。これが役立ちの性質であり、喜びです。